

第53回企画展

# パリ・ユネスコ 日本庭園と阿波の青石

入場無料

— 鈴江基倫関係資料から —

平成28年4月26日[火]～8月7日[日]

徳島県立文書館 展示室

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：毎週月曜日 毎月第3木曜日（祝日と重なった場合は翌日）

展示解説 6月5日(日)・7月3日(日) 午後1時30分～



※出典下記

※越智栄一氏撮影  
イサム・ノグチ財団および庭園美術館、  
ニューヨーク；寄贈：越智信男氏



文化の森総合公園 徳島県立文書館  
Tokushima Prefectural Archives

〒770-8070 徳島市八万町向山  
TEL 088-668-3700 FAX 088-668-7199  
<http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp/>

# ごあいさつ

ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)は、教育、科学、文化を通じて世界の平和と安全に貢献することを目的に1946(昭和21)年に設立された国連の専門機関の一つです。現在、ユネスコは世界遺産の登録・保護、歴史的記録遺産の保全など幅広い活動を行い、私たちにとって身近な存在となっています。ユネスコが設立されて70周年を迎える本年、当館では「パリ・ユネスコ日本庭園と阿波の青石」と題して、徳島市在住の鈴江基倫氏資料を紹介します。

フランス・パリのユネスコ本部に1958(昭和33)年に開園した日本庭園は「平和の庭園」といわれ、彫刻界の巨匠イサム・ノグチによって設計されました。ノグチは、日本から持ち込まれた桜・梅などの樹木や本県産の青石(緑色片岩)を含む大小の庭石を配して、自然と人類の調和を表現した日本庭園をつくりました。その庭園の制作に携わった一人が、若き造園家鈴江基倫氏でありました。ノグチは、制作に先立つ1957年4月に庭石を求めて、作庭家・庭園史研究家の重森三玲とともに来徳し、鈴江弥太郎・基倫父子と神山町の広石溪谷を訪ねて、同町産の青石を選定しました。

ユネスコ本部の日本庭園の制作は、1957年9月から始まりましたが、作業の大幅な遅れから翌年3月にノグチと重森の推薦を受けて、鈴江基倫氏がパリに派遣されました。鈴江氏は、以後約3か月にわたりノグチの助手として、ノグチと起居をともにしながら作庭に従事しました。このような経緯を経て、イサム・ノグチ念願の日本庭園がユネスコ本部に完成しました。

今回の展示は、2014(平成26)年に鈴江基倫氏から400点に余る関係資料の寄託を受けて開催するものです。本展をとおして、本県の造園家鈴江基倫氏が海外における日本文化の紹介に大きく貢献したこと、またその背景に、神山町産の青石を介して彫刻家イサム・ノグチ、作庭家重森三玲と鈴江弥太郎・基倫父子の間に結ばれた人間関係があったことに注目していただければと思います。

最後になりましたが、貴重な資料をご寄託いただきました鈴江基倫氏、様々なお助言をいただきました安田博武氏をはじめ越智信男氏、中田勝康氏、山吹知子氏、重森三玲ご親族の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成28年4月26日

徳島県立文書館長 山下知之

## もとのり 鈴江基倫氏略歴

1929(昭和4)年	鈴江弥太郎・キサヨの長男として徳島市名東町に生まれる
1946(昭和21)年	徳島県立農業学校林業科を卒業し父親が経営する鈴江松寿園(後の鈴江造園)に就職
1957(昭和32)年	ユネスコ本部日本庭園に使用する青石の採取・石組試作・搬送に従事する
1958(昭和33)年	ユネスコ本部日本庭園工事助手としてパリに趣く
1970(昭和45)年	鈴江造園代表取締役に就任
1984(昭和59)年	徳島県造園業協会会長に就任(～1987年)
1988(昭和63)年	徳島県造園業協会顧問に就任(～2000年)
1997(平成9)年	鈴江造園を廃業する



パリの街角にて

# ユネスコ本部日本庭園に使われた阿波の青石

1946(昭和21)年11月、ユネスコは国際連合の専門機関のひとつとして発足した。日本は国連加盟に先立つ1951(昭和26)年7月に加盟が認められ、現在にいたっている。

1950年代に入ると、パリ・ユネスコ本部建設プロジェクトが開始されるが、そこにはパブロ・ピカソやヘンリー・ムーアなど12名の世界的な芸術家の作品が設置されることとなった。その一人が日系アメリカ人のイサム・ノグチ(1904~88)であった。彼に委嘱されたのは日本様式を含む庭園の設計であった。当初予定されていたのは建物に隣接する広場(上の庭)のデザインであったが、彼はそれに隣接する空間に回遊式庭園(下の庭)もあわせて建設することを提案。資金面での問題も発生したが、日本の外務省やユネスコ支部などの協力も取り付けて、1957(昭和32)年、ユネスコ本部の「平和の庭」(通称「日本庭園」)は着工の運びとなった。

パリに日本庭園を作るにあたって、ノグチが助言を仰いだのが、戦前から作庭家・庭園史研究者として活躍していた重森三玲(1896~1975)であった。1957年4月、重森が庭園と茶室を建設中であった愛媛県の越智

家をノグチが訪問して指導を受けている。当時、徳島市で造園業を営んでいた鈴江弥太郎(鈴江造園創業者)らとの交流もあって、「阿波の青石(緑色片岩)」の魅力を知っていた重森は、この石をユネスコ本部の庭園に使うことをノグチに薦めている。

同年4月19日、徳島を訪れたノグチと重森は鈴江弥太郎の案内で阿波国分寺庭園や天狗久工房などを見学。翌日、ノグチ・重森・鈴江弥太郎・鈴江基倫(弥太郎長男)らは、かねてから親交のあった石材商杉山高一が神山町阿野の広石溪谷に持っていた採石場を訪れた。このときノグチと重森は予定を大きく上回る80個の石を選んでいく。愛媛から同行していた越智栄一が撮影した一連の写真には、このときの状況が生き生きと映し出されている。

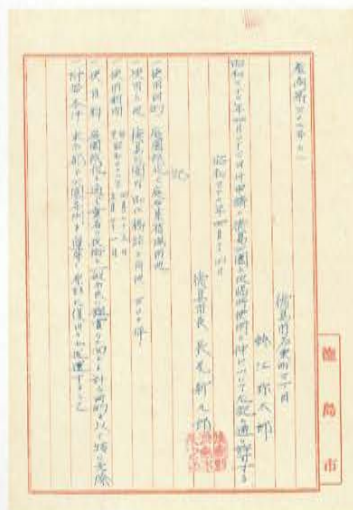
4月30日から搬出が開始された石は、試作場として徳島市が無償で提供した徳島公園内助任橋南詰三角地に運ばれた。5月7日にはノグチと重森が再び来徳。翌日から10日までユネスコ庭園を想定した石の仮組が行われ、この過程で80個のうち58個がパリに送られることになった。11日と12日には試作の石組が一般市民に公開。6月9日には青石安着祈願祭が挙行された。選ばれた青石は厳重に箱詰めされ、小松島港から神戸港を経由して7月21日にフランス・マルセイユ港へ到着、その後陸路パリへと運ばれていった。



設計図を広げているのがイサム・ノグチ。左側で腰を下ろしているのが重森三玲。鈴江父子は測定と記録を担当している(越智栄一氏撮影 イサム・ノグチ財団および庭園美術館、ニューヨーク;寄贈:越智信男氏)。



石の輸送



庭園試作のための徳島公園使用許可証



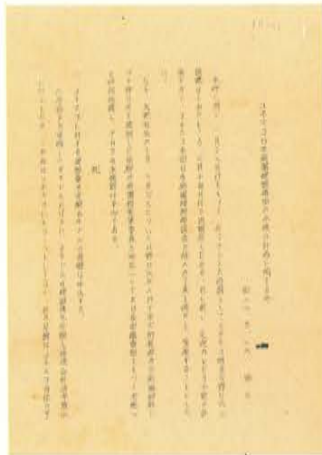
試作中の石組み

# パリに派遣された『助っ人』鈴江基倫

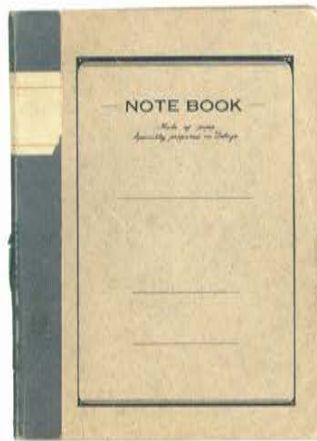
パリに日本庭園を作るにあたって、ノグチは鈴江弥太郎らを助手としてパリに招く計画を持っており、鈴江父子は1957(昭和32)年5月に外務省国際協力局に履歴書を送っている。派遣は建設工事が開始される9月ころの予定であったが、この年の派遣は結局見送られることとなった。外務省国際協力局から鈴江弥太郎宛の書簡などからすると、資金難が最大の理由であったようである。同年9月、ユネスコ本部日本庭園の建設工事が開始されるが、現地で雇った労働者が不慣れで、作業は大幅に遅れる。このことが翌年の鈴江基倫らのパリ派遣に繋がっていく。

1958(昭和33)年2月26日付けの外務省国際協力局「ユネスコ日本庭園建設援助の今後の計画に関する件」によると、ノグチの要請によって桜などの苗木をパリに送ること、及び植木と石組みの専門家2名を1名ずつ相前後してパリに派遣すること、そのうちの1名はイサム・ノグチと重森三玲の推薦により鈴江基倫であることが決定している。前年の青石採取に父とともに従事した経験と、その技術を重森が保証していることも理由としてあげられている。鈴江基倫に支給された経費は航空運賃・滞在費・支度金・手間賃(留守家族に支給)など計683,900円。工事従事期間は最低1ヶ月で、滞在経費を節約して余剰が出た場合は延長も可能というものであった。鈴江基倫らの派遣経費及び苗木の輸送経費は集められた募金でまかなうこととなっていた。このとき鈴江基倫は28歳。妻と幼い2人の娘を残しての渡仏であった。

鈴江基倫は大学ノートに徳島を発ってから帰郷するまでの日記を記していた。これらをもとに彼のパリでの活動を再現してみよう。



ユネスコ日本庭園建設援助の今後の計画に関する件(昭和32年となっているが33年の誤記)



NOTE BOOK(鈴江基倫のパリ滞在中の日記)

3月16日に徳島駅を出发。京都で重森と合流し、夜汽車で東京に向かう。17日に外務省にあいさつに出向いた後に、埼玉県安行植物見本園(現川口市 埼玉県花と緑の振興センター)でノグチから要請のあった苗木を選定。翌日は苗木を剪定・荷造りの上で航空会社に送付。19日は父弥太郎が親族とともに観光バスで都内観光。そして、3月20日に羽田空港を発ち、マニラ・サイゴン(現ホーチミン)・ニューデリーなどを經由して22日にパリに到着した。パリではノグチのアトリエ兼住居に同居することになった。

3月24日の午後には植物検疫を済ませて現場に到着した苗木の仮植えが行われ、この日から本格的な作業がスタートする。最初は鈴江基倫が日記に「今日も土運び」「今日も朝から石運び」と毎日のように記しているように、土運びが中心であった。その後、石の据え付け作業が本格化するが、石の配置をたびたび変更するノグチの作業方法に鈴江基倫は少なからざる違和感を抱いていたようである。また、ノグチとの共同生活では何かと気を遣わなければならない、雨続きのパリの不順な天候と徳島に残してきた家族への思いも彼を苦しめていた。

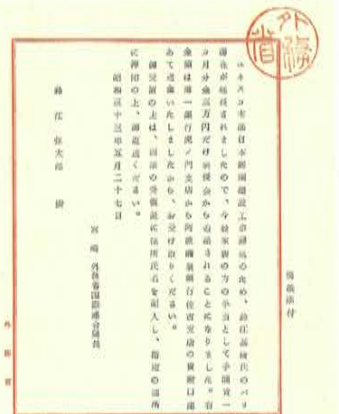
4月21日、もうひとりの助手である野口信一(重森三玲の直弟子)がパリに到着し、ノグチのアトリエ兼住居での3人の共同生活がはじまる。仲間ができた



工事現場にて(鈴江基倫が着用しているのが重森・林泉のハッピー、後ろにエッフェル塔が見える)



工事現場にて(左側が野口信一)



パリ滞在期間延長にともなう手間賃支給通知

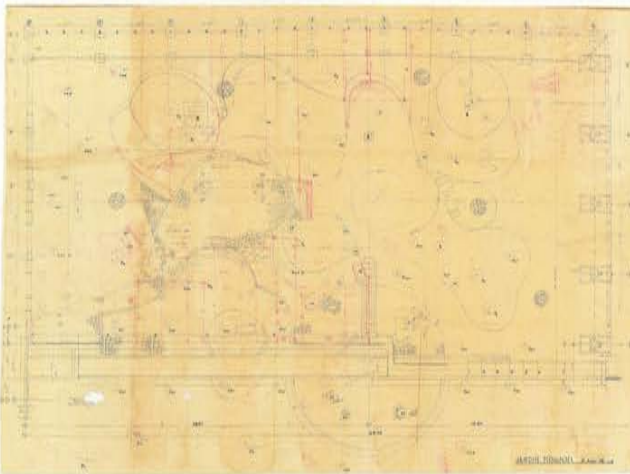
ことは大きな励ましになったようである。

当初の予定では、基倫のパリ滞在は1ヶ月で、野口と交替して帰国することになっていた。しかし、ノグチのたつての希望で滞在期間は2ヶ月延長されることになった。しかし、日本側の予算の問題もあり、留守家族に3万円の手間賃が支給されたのみで、滞在費等の追加支給は認められなかった。

基倫は作業中や現場への行き帰りにはハッピーに地下足袋姿であったが、このユネスコ本部日本庭園建設現場の「助っ人職人」は現地でも大きな話題となり、多くのマスコミが取材に詰めかけている。また、当時パリを訪れていた千玄室(茶道家)や石井好子(シャンソン歌手)らの文化人が建設現場を訪問している。

休日の基倫はパリ市内を精力的に回り、そこで目にした街並みや人々の様子についての率直な感想を日記に書き留めている。また、映画館にも時々足を運んでおり、観賞した映画の中にはアメリカ映画の「八十日間世界一周」や日本の「太陽族映画」なども含まれている。

なお、彼が滞在中のフランスでは軍のクーデターによりそれまでの政権が崩壊し、隠棲中であったドゴールが首相(後に大統領)に就任している。第四共和政か



庭園施工時に使用した平面図



建設途上のユネスコ日本庭園(庭石の設置や大木の植栽はほぼ完了している 1958年6月)

ら第五共和政への転換というフランス史上の一大事件に遭遇した彼は、このときの混乱状況を「(5月19日)この間から大分内らんがはげしくなり、軍隊と政府が対立している。今日はストライキまで起きてしまった…日本の二二六事件のようなもんだそうだ」(原文のまま)と記している。日本人の海外渡航がまだ珍しかったこの時代、パリに滞在した一人の市民の記録としても鈴江基倫の日記は貴重な歴史資料といえる。

6月17日に最後の作業を終えた鈴江基倫は、19日に野口信一とともにパリを離れている。この時点で庭園は8割程度完成しており、同年10月に派遣された佐野輝一(作庭家、後に16代佐野藤右衛門)の助力を得てノグチは庭園を完成させている。このユネスコ本部日本庭園は、現在も訪れる人々の目を楽しませている。



ルーブル美術館前にて

6月21日に帰国した鈴江基倫は、22日には京都の重森三玲宅を訪問して帰国の報告を行い、翌23日に徳島に着している。7月1～4日の徳島新聞夕刊に「パリさまさま(パリ生活三ヶ月)」が連載され、7月18・19日には徳島駅前の産業観光会館で「パリ庭園写真展」が開催されるなど、彼のパリでの活動は当時の徳島県内でも大きな話題となっていた。



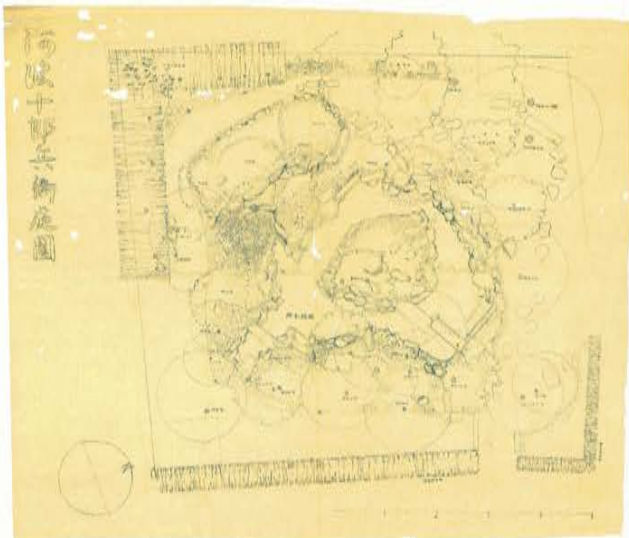
庭園現況(山吹知子氏撮影)

# 徳島の庭園図－重森三玲、鈴江弥太郎、イサム・ノグチー

鈴江弥太郎は、1928(昭和3)年鈴江松寿園(後の鈴江造園)を創業し経営も順調であったが、1937(昭和12)年に日中戦争が始まり軍に召集され中国戦線に赴いた。翌年4月召集解除になると、戦地で読んだ新聞記事で知った日本庭園の研究家である京都の重森三玲を訪ね指導を仰ぐことになる。鈴江家文書には、1938年の記述がある阿波十郎兵衛庭園(旧十郎兵衛屋敷庭園)の図面があり、弥太郎自身重森三玲と出会う前か

ら、古庭園に関心を寄せていたと思われる。

重森三玲は1932(昭和7)年6月、日本庭園の研究団体である京都林泉協会を創立し、1936(昭和11)年から全国300箇所以上のさまざまな古庭園を実測調査し、日本庭園史のさきがけとなった。その研究は1939年『日本庭園史図鑑』26巻として結実している(この図鑑には1938年1月に測量した千秋閣庭園(徳島城旧表御殿庭園)が掲載されている)。



「阿波十郎兵衛庭園」鉛筆書 別に青焼きもあり。青焼の裏に徳島市名東町すずえ造園工務所の判あり。「昭和13年1月」の記述あり。



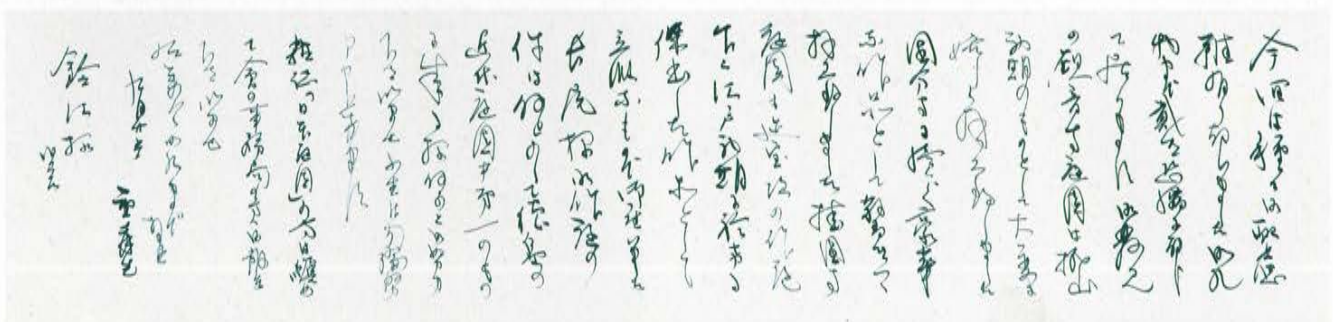
「十郎兵衛屋敷 鶴亀の庭」 絵はがき



阿波十郎兵衛屋敷庭園現況



「国分寺庭園視察中のイサム・ノグチ」 1957(昭和32)年4月19日 (越智栄一氏撮影 イサム・ノグチ財団および庭園美術館、ニューヨーク; 寄贈: 越智信男氏)



「重森三玲書簡」 鈴江弥太郎宛、1936(昭和31)年9月25日付

重森は、1940(昭和15)年4月鈴江弥太郎を通じて知った石材商杉山高一の案内で、阿波国分寺庭園を訪問する。当時の国分寺庭園は荒廃していたが、豪壮な青石の石組みに圧倒され、重森自身の庭園観を変えたとされている。この後重森の作庭には、鈴江や杉山を通じて阿波の青石が多く使われているという。

1956(昭和31)年9月25日付けの重森三玲から鈴江弥太郎宛の書簡によれば、9月に重森は鈴江弥太郎らの紹介で徳島市勢見町の観音寺、阿南市長生町の桂国寺両庭園の視察を行っていることがわかる。

翌年、イサム・ノグチがパリ・ユネスコの庭園を手懸ける際に重森三玲を訪れると、重森は庭の石材として青石を薦める。そこで、ノグチと重森は4月19日か

ら徳島に入り、鈴江弥太郎・基倫、杉山高一らの案内により阿波国分寺庭園の視察を行っており、翌20日には神山に入り石の選定を行っている。

その後も重森は、徳島に来県し、鈴江弥太郎・基倫らの協力を受けながら多くの庭園の調査実測を行っている。1976(昭和51)年完結の『日本庭園史大系』全35巻には千秋閣庭園・国分寺庭園・観音寺庭園をはじめ8つの庭園を掲載している。また、同書の別巻第2巻に掲載されている「全国庭園所在一覧」には、これ以外に丈六寺庭園・旧十郎兵衛屋敷庭園・童学寺庭園など10の庭園を収めており、徳島において精力的に古庭園の調査をしていたことがわかる。



「千秋閣平面図」青焼き、裏に徳島市名東町すずえ造園工務所の判あり。(年代不明)



「千秋閣庭園」1965(昭和40)年



「徳島城旧表御殿庭園(千秋閣庭園)にて園遊会」1902(明治35)年

## 展示資料一覧

No.	表題	年代	資料番号
<b>ユネスコ日本庭園に使われた阿波の青石</b>			
1	庭園試作のための徳島公園使用許可証	1957(昭和32)年	㊿I00089
2	石材安着祈願祭案内状	1957(昭和32)年	㊿I00109
3	イサム・ノグチ(電報・庭石の安着を祈る)	1957(昭和32)年	㊿I00123
4	見積書(石材費・運搬費等)	1957(昭和32)年	㊿I00097
5	フランス(パリ)向庭石カーゴリスト	1957(昭和32)年	㊿I00092
6	宮崎章(書簡・代金支払い猶予依頼)	1957(昭和32)年	㊿I00090
7	日本庭誇巴里(重森三玲色紙)	1957(昭和32)年	㊿I00300
8	石組(イサム・ノグチ色紙)	1957(昭和32)年	㊿I00297
9	花と石(重森三玲とイサム・ノグチ合作の色紙)	1957(昭和32)年	㊿I00299
<b>パリに派遣された*助っ人・鈴江基倫</b>			
10	千葉康雄(書簡・庭師派遣の件)	1957(昭和32)年	㊿I00101
11	ユネスコ日本庭園建設援助の今後の計画に関する件	1958(昭和33)年	㊿I00125
12	誓約書(ユネスコ本部日本庭園造園工事専心従事について)	1958(昭和33)年	㊿I00126
13	御敬送者芳名	1958(昭和33)年	㊿I00001
14	鈴江基倫渡仏についての礼状	1958(昭和33)年	㊿I00056
15	NOTE BOOK(鈴江基倫パリ滞在中の日記)	1958(昭和33)年	㊿I00039
16	NOTE BOOK(苗木などパリ滞在中のメモ)	1958(昭和33)年	㊿I00040
17	ユネスコ日本庭園平面図	1958(昭和33)年	㊿I00172
18	パリ滞在期間延長にともなう手間賃支給通知	1958(昭和33)年	㊿I00127
19	ハッピ(鈴江造園 鈴江基倫がパリで着用)	1958(昭和33)年	㊿I00302
20	ハッピ(重森・林泉 鈴江基倫がパリで着用)	1958(昭和33)年	㊿I00303
21	PHOTO(庭石採取・パリでの作業風景等の写真アルバム)	1957-58年	㊿I00129~131
<b>徳島の庭園図—重森三玲、鈴江弥太郎、イサム・ノグチ—</b>			
22	阿波十郎兵衛庭園(実測図)	1938(昭和13)年	㊿I00137
23	千秋閣平面図	戦中期	㊿I00136
24	阿波国分寺庭園平面図	1966(昭和41)年	㊿I00138
25	長尾氏邸設計図	1956(昭和31)年	㊿I00139
26	徳島新聞夕刊記事(重森三玲の寄稿文)	1956(昭和31)年	㊿I00200
27	重森三玲(書簡、観音寺・桂国寺庭園等の件)	1956(昭和31)年	㊿I00246
28	重森三玲(書簡、日本庭園史大系の件)	1974(昭和49)年	㊿I00281

\*資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

第53回企画展

# パリ・ユネスコ 日本庭園と阿波の青石 —鈴江基倫関係資料から—

平成28年4月26日

編集・発行

徳島県立文書館

〒770-8070

徳島市八万町向寺山

電話 088-668-3700

印刷

株式会社 教育出版センター

〒771-0138

徳島市川内町平石流通団地27

電話 088-665-6060



▲パリの職人と共に